

## はじめての歎異抄講座(1)

### 1. 親鸞聖人略伝

- ①誕生：1173年5月21日（承安3年4月1日）  
京都・日野の里（現在の京都市伏見区）
- ②得度：1181年（養和元年） 9歳  
京都・青蓮院白川坊
- ③修行：1181年～1201年（建仁元年） 9～29歳  
比叡山
- ④法然聖人との出会い：1201年 29歳  
京都・吉水
- ⑤流罪：1207年（承元元年）～1211年（建暦元年） 35～39歳  
越後
- ⑥伝道：1214年（建保2年）～1235年（文暦元年） 42～62歳  
関東  
※1224年（元仁元年）4月15日 『教行信証』草稿本が完成（浄土真宗立教開宗）
- ⑦帰京（執筆）：1235年～  
京都
- ⑧往生：1263年1月16日（弘長2年11月28日） 90歳  
京都・善法院（押小路南、万里小路東）



### 2. 唯円について

- ・1222年（貞応元年）～1289年（正応2年） 68歳で往生
- ・常陸国河和田（現在茨城県水戸市）に居住から、「河和田の唯円」と称される。
- ・親鸞の真信を伝えた直弟子として親鸞の曾孫・覚如にも信服されていた。
- ・親鸞の末女・覚信尼の子・唯善は、河和田の唯円に師事。

- ・『歎異抄』は唯円晩年に書かれたものと思われる。
- ・晩年は大和国吉野で布教し、秋野川の近辺で往生。

### 3. 『歎異抄』の構成

#### 1) 親鸞聖人の語録

- ・序 … 唯円によって、聖人の語録を書くに至った思いと、『歎異抄』を書くに至った動機が示されている。漢文で書かれている。

- ・第1章～第10章

#### 2) 唯円の異議批判

- ・第11章～第18章：異議を批判し、その間違いを正す。

#### 3) 唯円の後記

- ・後序 … 『歎異抄』読者への要望と書名の由来

### 4. 「序」

ひそかに：内密に。そっと。自分の心のなかで、人知れず思いを考えるさま。

(公なる本願の仏法を私的に了解したということをあらわす謙譲表現)

- ・ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する恵日なり。(『教行信証』総序 註釈版 p.131)

- ・ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛んなり。(『教行信証』後序 註釈版 p.471)

愚案：愚かな考え。つまらない見解。

(自分のよく考え抜いたことを謙譲していった言葉)

先師の口伝の真信：今は亡き師親鸞聖人の口伝による真実なる信心。

- ・「信」はうたがひなきころなり、すなはちこれ真実の信心なり、虚仮はなれたるころなり。(『唯信鈔文意』註釈版 p.699)

有縁の知識：仏法に縁を結び、正しい教えを説いて仏道に導いて解脱を得させる僧や賢者。ここでの知識は善知識の省略形。

いかでか：「どうして…か」

易行の一門：阿弥陀仏の本願力によって浄土に往生してさとりを開く他力のただ一つの道。易行に対する語は難行。

自見の覚語：自分本位の立場に立つ考え、見解。自分で覚ったような言葉。

他力：阿弥陀仏が衆生を救済するはたらき。阿弥陀仏の力によってのみ浄土に生まれ、救われること。

宗旨：仏教の宗派における基本的、根本的な教理・教義。

御物語の趣：親鸞聖人がふだん話されていたことの趣旨。物語は談話のこと。

同信行者：信心を同じくして念仏する人。真宗では同行や同朋ともいう。